
序文

本稿は、2010年度京都エラスムス計画の一環として2010年7月25日から9月25日にかけて行った、中国社会科学短期集中プログラムの成果報告書である。本プログラムでは、「都市班」および「農村班」に分かれ、南京を拠点に中国社会科学に関する調査を行った。本稿は、都市班の成果報告である。都市班のメンバーは南京大学の金子暄（南京大学社会学院修士課程）、李胜（南京大学社会学院修士課程）、そして京都大学の櫻田涼子（京都大学大学院グローバルCOE 研究員）、平井芽阿里（京都大学大学院グローバルCOE 研究員）、松谷実のり（京都大学大学院文学研究科博士後期課程）の計5名である。

南京市の中心部は俗に「東豊西貴、南貧北賤」と言われ、4つの区域に分かれるという。東側の钟山風景区は、美しい山からの風が吹き込み、空気も綺麗だということで高級住宅地街として開発が進んでいる。また西側は、南京大学や南京師範大学など日本人留学生の受け入れが盛んな大学を始めとし、政府の各種機関が集まる地域であるため「貴」という地域として認識されている。一方、南側は「老城南」と称され、古くからの人々の生活が残っている地域である。現在では、近代化の余波を受け、強制退去を宣告される住居も多いものの、今なお多くの人々が昔ながらの生活を営んでいる。そして、長江大橋付近の下関と呼ばれる港湾地域は人口密度が高く、他地域からの新規流入人口も多いという。このような様々な文化的背景を持つ人々が集住する地域である南京社会について、「都市班」では「現代南京の信仰・生活・婚姻に関する社会人類学的研究」と題する共同調査を行った。

本調査では、まず現代南京の信仰を把握するため、南京市の寺という寺を訪れた。寺や廟では人々が熱心に祈りを捧げる姿が印象的であった。ある時は、今にも壊れそうなバスに乗り込み、ガタガタの道を砂埃を舞い上げひた走った。40度の灼熱の中、全く先の見えない広い広い道を1時間も歩いたこともあった。そして牛首山の墓では、生涯忘れがたい調査を行うことになった。また、婚姻に関する調査では、南京人の結婚式を観察させてもらう機会を得た。まだ覚めやらぬ朝方、爆竹を轟かせ、新郎が新婦を奪いに新婦の実家までやって来る。新婦の友人が家の門を塞ぎ、新郎に様々な形で「愛の証明」をさせる。深紅のドレスを着た中国の美しい花嫁に、「ふるさと」を熱唱し捧げた事は、今はよき思い出である。また、本調査では南京で生活する日本人労働者にも目を向けた。中国の空の下、日本人が経営する居酒屋で焼き鳥を食べながら深夜まで話し込んだ日の事は忘れられない。

本稿は、このような調査を元に完成した成果報告書である。しかし、2ヶ月の調査で得た全てをこの1篇にまとめられるはずはなく、本稿は今後の研究の基礎的資料として一端提示し、熟考が必要な部分についてはさらなる共同研究を継続していく予定である。なお、本調査にご協力いただいた全ての方々に、この場を借りて記して厚く御礼申し上げる次第である。

2010年11月15日
平井芽阿里・櫻田涼子